



# イルカ通信

隔月1回発行  
バックナンバーは無料でダウンロードできます  
(下記参照)

小笠原ホエールウォッチング協会 (OWA) 2010年2月1日 No.034



## 小笠原で暮らすイルカたち

### 「今度は父島での再会」

2003年に始まったイルカ調査。調査回数は2009年12月13日現在で298回。その内訳は父島列島周辺海域（以下：父島海域）が260回、母島列島周辺海域（以下：母島海域）が14回、髯島列島周辺海域（以下：髯島海域）が24回。現在のところ父島海域での調査が主となっています。数少ない母島海域や髯島海域の調査の結果、ミナミハンドウイルカが列島間を移動することが明らかになってきました。しかし移動が日常的なものなのか、成長段階や時期で生息する海域を変えるのか、移動の意味はまだまだ分かっていません。

2006年9月と2008年9月に母島海域で確認されたメスの個体#205。イルカ通信27号「母島での再会」にも登場した個体です。06年確認時は一回り大きい#204に寄り添って泳ぐ姿が、2008年確認時は若者グループと思いき群れの中で泳ぐ姿が確認されました。成熟するに従って増えるお腹のまだら模様がないことから、若い個体であると考えられます。

さて、「母島での再会」は次のように記事を締めくくりました。『この個体は、これまで母島でしか確認されていません。これから母島周辺に留まり続けるのでしょうか。それとも、いつの日か他の場所で確認されるようになるのでしょうか。』この疑問については思ったより早くその答えが出ました。2009年の9月、父島海域の南島周辺で大人と若者が入り混じった群れの中で泳ぐ姿が確認されたのです。今後#205は、どの海域でどの程度確認されるのでしょうか。父島海域か母島海域か、それとも髯島海域か、あるいはそれ以外の海域か？疑問は尽きませんが、調査研究を継続することで少しずつ情報が集まってきています。母島海域や髯島海域での調査回数を増やすことで、移動の謎についても新しい知見が得られるかも知れません。続報にご期待下さい！

### 「2か所の繁殖地候補」

OWAは鯨類だけでなくエコツーリズムの調査研究も実施しており、小笠原のエコツーリズムの新たな対象としてアホウドリ類にも注目しています。

小笠原の髯島ではアホウドリの新しい繁殖地を作るための取組が行われています。絶滅の危機に瀕したアホウドリの保全を目的としたもので、伊豆鳥島から運ばれたヒナを、アホウドリの実物大模型（デコイ）30体と音声装置も設置した野外飼育地で巣立ちまでのあいだ人の手で飼育するというもの。巣立ったヒナが数年後に髯島に戻り、繁殖地を形成することが期待されています。この取組の結果、現在まで計25羽のヒナが髯島を巣立ちました。

平成21年は野生のアホウドリが飼育地に飛来したり、髯島鳥島で求愛行動が確認されたり、5月に髯島を巣立った飼育個体が同年10月にサンフランシスコ沖で確認されたりなど、繁殖地の造成への期待が高まる年となりました。

さて、新しい繁殖地を作るための取組が小笠原以外の場所でも行われているのはご存じでしょうか。その場所とは北西ハワイ諸島のミッドウェイ環礁のイースタン島。平成12年頃よりデコイ16体と音声装置が設置されています。こちらでは小笠原で実施されているような野外飼育は行われていません。取組が始まってから10年程経ちますが、現時点では繁殖地の形成には至っていないそうです。しかし周辺へアホウドリ複数個体が飛来していることから、アホウドリの繁殖地となる日も近いかもしれません。小笠原とミッドウェイ、そのいずれもがアホウドリの新繁殖地となって、少しでも早くアホウドリが絶滅の危機から脱する事を祈るばかりです。

ちなみに野外飼育地での飼育の様子はOWA事務所、小笠原村観光協会、母島観光協会、ビジターセンター、福祉センターに置いてある写真集で見ることができます。興味がある方は是非一度ご覧下さい。



特徴的な尾ビレの切れ込み

